

世継ぎのない王

——『マクベス』における父性の表象——

塚 田 雄 一

1. はじめに

世継ぎの有無は、ルネッサンス期イングランドにおいて、大きな社会不安を形成していた。当時、地主階級の約二割が世継ぎをもうけなかったために、家名や財産を自らの血筋を引く者に継承させることができなかったといわれる¹。世継ぎの不在は、それが王家であれば、王朝の滅亡を意味した。世継ぎをもたなかったエリザベス女王のテューダー朝から、スコットランド王ジェイムズ六世のスチュアート朝へ王権が移行される様を目の当たりにし、また自らも世継ぎの一人息子を失った経験をもつ劇作家シェイクスピアは、その演劇やソネットを通じて、世継ぎや継承問題をめぐる不安を繰り返し描き出した。

継承問題を物語展開の軸に据えた作品の一つに『マクベス』がある。世継ぎをもたないマクベスは、自らの手にした王位を他人の子孫に手渡さなければならないという魔女たちの預言を受ける。そして、自らを「実らぬ王冠」(“a fruitless crown”)を被らされ、「不毛の王笏」(“a barren sceptre”)を握らされた不毛な王であると嘆く。

MACBETH. Upon my head they plac'd a fruitless crown,

And put a barren sceptre in my gripe,

Thence to be wrench'd with an unlineal hand,

No son of mine succeeding.

(*Macbeth*, 3. 1. 60-63)²

『マクベス』には、この王朝劇における継承問題の重要性を示唆するかのよう
に、父バンクォーに従順に付き添い、将来王位を継承すると預言されるフリー
アンス、幼いながら機知に富み、父の行動の犠牲となったマクダフの息子、戦
場で見事な戦死を遂げ、父の誇りとなるスィーワードの息子、そして父ダンカン
王の仇を討ち、王位を奪い返すカンバランド公マルコムといった立派な「息子

たち」が生き生きと描き出され、皮肉にも、マクベス夫妻の息子の不在を際立たせている。マクベス夫妻の世継ぎの不在は『マクベス』の主要なテーマであり、テキストの様々な表象のモチーフとなっている。本論では、世継ぎの不在という観点から、そうした表象の読解を試みる。

2. 第二の結婚

王朝劇におけるその重要性を鑑みれば、劇中、マクベス夫妻の子供の不在に対する直接の言及は少ない (e.g. “He has no children” [4. 3. 216])。しかし、子供をもたない夫婦の情景は様々な隠喩を通して全篇に描き出されており、こうしたテキストのダイナミズムを最もよく示しているのが、性的なイメージに彩られた、ダンカン王の殺害をめぐる場面である。

ダンカン王殺しは、夫の野望を叶えようと奔走する献身的なマクベス夫人と、妻の愛に応えようと気を奮い立たせるマクベスが力を合わせて取り組む共同事業であることに注意する必要がある³。ブラッドレーも指摘したように、材源であるホリンシェッドの『年代記』では、女王を目指すマクベス夫人自身の野望が強調されているが、シェイクスピアの『マクベス』では、マクベス夫人はマクベスを王にすることだけを願っており、二人は野心を共有する一心同体の夫婦として描かれている⁴。王の殺害計画を練るマクベス夫妻が、共に「私たち」(“we”) という主語を用い続けていることも、それを裏づけているかのようである (“We will proceed no further in this business” [1. 7. 31]; “If we should fail?” [1. 7. 59]; “our great quell” [1. 7. 72]; italics added)⁵。

マクベス夫人が王の殺害計画を主導する傍ら、マクベス自身は大逆罪を企てることに怖気づいてしまう。マクベス夫人はそうしたマクベスに対して、「男らしさ」(manhood) を発揮するよう求め、自らの野望を実現するために行動をとることができないのであれば、マクベスを「夫」であるとも「男」であるとも見なさない、と警告する (“From this time / Such I account thy love” [1. 7. 38-39]; “When you durst do it, then you were a man” [1. 7. 49])。そして、願望の実現に躊躇うマクベスの行動能力の欠如を、寢床における男の性的不能に擬えさせている (“Art thou afeard / To be the same in thine own act and valor / As thou art in desire?” [1. 7. 39-41])。マクベスは王殺しという試練を通じて「男らしさ」を証明しなければならぬ状況へと追い込まれる。

ダンカン殺害のため、彼の寝室へと足を忍ばせるマクベスは自らをルークリースの凌辱に向うタークウィンに重ね合わせ (“thus with his stealthy pace, / With

Tarquin's ravishing [strides], towards his design / Moves like a ghost" [2. 1. 54-56])、また、マクベス夫人は殺害現場を「闇の毛布」("the blanket of the dark" [1. 5. 53])で覆い隠すよう、悪の精霊たちに呼びかける⁶。無防備に眠る対象を闇夜にまぎれて襲う行為として、「王殺し」と「凌辱」を結びつける二人の比喩は、王殺しのもつ性的な側面を強調している。さらに、マクベス夫人の後押しによって決意を新たにしたマクベスは、王の殺害に赴く前に、妻に向かって「男の子だけを生むのだ。お前のような力強い気質の女からは男しか生まれまい」("Bring forth men-children only; / For thy undaunted mettle should compose / Nothing but males" [1. 7. 72-74]) と言い放つ。マクベス夫人の「男らしい」気質を強調する発言であるとはいえ、男児の出産というイメージが王殺しの前に呈示されることは示唆に富んでいるだろう。マクベス夫人の行ってきた挑発のもつ性的なニュアンスを考えると、王位篡奪は俄かに二人の性的な交渉 (sexual consummation)、あるいは「子作り」の様相を帯び始める⁷。

ダンカン王を殺害する前は、マクベスとマクベス夫人の関係は「息子と母」のそれを想起させた。マクベス夫人は、マクベスには彼の優しい気性を特徴づける母乳が流れていると心配する ("Yet do I fear thy nature, / It is too full o' th' milk of human kindness / To catch the nearest way" [1. 5. 16-18])。一方で、マクベス夫人は、自らの体内から母乳を排除するよう、悪霊に呼びかけており ("Come to my woman's breasts, / And take my milk for gall" [1. 5. 47-48])、あたかも、自分がマクベスに母乳を与える／与えない権限をもつ母親であるかのように振舞っている。王殺しの前に体内の母乳を胆汁に変えることで、息子マクベスの乳離れを促しているかのようなのである。前言を翻し、王の殺害計画の中止を提案するマクベスを非難して、マクベス夫人は「乳を吸う赤子を乳首から引き離す」という強いイメージを呈示するが ("I would, while it was smiling in my face, / Have pluck'd my nipple from his boneless gums, / And dash'd the brains out, had I so sworn as you / Have done to this" [1. 7. 56-59])、彼女の台詞に登場する「赤ん坊」は夫人に依存するマクベス自身の姿と奇妙に重なり合う。

王の殺害をやり遂げたマクベスを迎えるマクベス夫人の第一声 ("My husband!" [2. 2. 13]) も象徴的である。マクベス夫人がマクベスを「夫」と呼ぶのは、このときが初めてである。まるで王を殺して、初めてマクベスを「夫」と認めるかのように。ダンカン王殺しは、マクベスを立派な男に、すなわち「息子」から「夫」へと変えるマクベス夫人主導の計画であり、マクベス夫妻にとって、「第二の結婚」であったといえる。

しかし、王を殺害した直後から、マクベスの弱さ (“Infirm of purpose!” [2. 2. 49]) が露呈されてしまう。心を乱し、後悔の念に苛まれるマクベスは、恐怖のあまり、誤って持ってきた血塗れた短剣を殺害現場に戻すことを拒否し、恐怖に慄く子供のように、とマクベス夫人に叱咤される (“’tis the eye of childhood / That fears a painted devil” [2. 2. 51-52])。

ルネッサンス期の演劇において、「剣」は英雄的な男性性の表象として、しばしば用いられ⁸、『マクベス』においても、冒頭、強靱な男性性を発揮する勇敢な兵士として紹介されるマクベスは「血煙る剣」 (“brandish’d steel, / Which smok’d with bloody execution” [1. 2. 17-18]) という印象的なイメージと結びつけられている。また、王殺しによってマクベスの男性性が証明されることを示唆するかのよう、マクベスをダンカンの寢床に導くのは宙に浮かぶ短剣の幻影である (“Thou marshal’st me the way that I was going, / And such an instrument I was to use” [2. 1. 42-43])。しかし、ダンカンを殺害して取り乱したマクベスは血塗れた短剣を扱いきれず、言われるままにマクベス夫人に手渡してしまう (“Give me the daggers” [2. 2. 50])。マクベスの「男らしさ」の失墜は、短剣を妻に手渡すマクベスの行為に象徴されているといえるだろう。同時に、男性性のシンボルがマクベス夫人に渡ることで、マクベス夫人の装う男性的な強さが印象づけられている。

また、「夫」の役柄を演じることができないとわかったマクベスに対して、マクベス夫人の態度に変化が表れ始めることにも注意したい。マクベスが「おまえ」 (“thou”) と親しく呼びかける一方、この第二幕第二場以降、マクベス夫人はマクベスに対し、一貫して「あなた」 (“you”) という呼称を用いて、距離を置いている。第三幕第四場では、殺したはずのバンクォーの亡霊を見たと言って取り乱すマクベスに対して、マクベス夫人は「男らしさ」を取り戻すよう、再び求めているが (“Are you a man?” [3. 4. 57])、マクベスが平常心を取り戻せないとわかると、マクベス夫人は怯えたマクベスを宥める役割に転じる。「あなたには眠りが足りない」 (“You lack the season of all natures, sleep” [3. 4. 140]) と言いつつ、寢床に誘うマクベス夫人に、悪夢にうなされた子供を宥めて寝かしつける母親の影を重ね合わせることもできるだろう。マクベスを「夫／男」に仕立て上げようというマクベス夫人の願いは破れ、二人の関係は再び「息子と母」のそれに戻ってしまうかのようである。

二人は王位の篡奪に成功し、当初の目的を達成したかに見える。しかし、マクベスは王位に就いたことに満足することはなく、強い苛立ちを表明する (“To

be thus is nothing, but to be safely thus” [3. 1. 47])。マクベスにとって、一代限りで終る王権は意味をもっていない。マクベスが戴冠直後に世継ぎの不在に言及するのもそのためである (3. 1. 60-63)。

マクベス夫人も自らの幻滅と不満 (discontent) を独白の中で述べている (“Nought’s had, all’s spent, / Where our desire is got without content” [3. 2. 4-7])。マクベスの王位篡奪を成功させても、マクベス夫人が得ることができなかつたと嘆くものは一体何だろうか。マクベス夫人の独白は「欲望を遂げても満足感が伴わない」と訳されることが多いが、彼女の口にする“content”は、「満足」という抽象的な感情だけでなく、実体のある「物」を指しているとは考えられないだろうか。いわば、王殺しという彼らの「第二の結婚」は「満足」(content)をもたらすこともなければ、「妻と男らしい夫」の間の「実り」(content)、すなわち「子供／世継ぎ」を生み出すこともない不毛な性的交渉に終わったのではなかつたか。一人前の男であると見なされるためには、妻帯し、子供をもつ父になる必要があった当時の社会通念に照らし合わせれば、マクベス夫人の求めたのは「子供をもつ立派な夫／父」としてのマクベスであつたと考えられる。マクベスをそのような一人前の男に育て上げようとしたマクベス夫人の試みは、何の実りももたらさぬまま、失敗に終わったといえる。

3. 父なる王 (father-king)

「第二の結婚」の失敗は、跡継ぎをもつ父、すなわち一人前の男になることのできないマクベスとマクベス夫人の困難を印象づける。しかし、マクベスは一人として「マクベス家の父」になることができなかつただけではない。『マクベス』全篇において、マクベスが本質的に父性と切り離された存在として、周到に描き出されていることにも注意を払う必要がある。

『マクベス』において、王は「国家の父」として君臨し、国民という「子供たち」を治める存在として表象されている。マクベス自身の言葉が最もよく表しているように、臣民は「父なる王」に忠誠を誓い、仕えることで、その愛と保護を見返りに得る“children and servant”である (“our duties / Are to your throne and state children and servants” [1. 4. 24-25])。ダンカン王も、国土に臣民という種を植えつけ、育て上げる父親として、王が負っている役目に言及している (“I have begun to plant thee, and will labor / To make thee full of growing” [1. 4. 28-29])⁹。理想の国王は、世継ぎによって王位継承を保持した「王家の父」であるとともに、象徴的な「国民の父」として、強大な父性を備えた存在でなければならなかつ

た¹⁰。フロイトが彼の『マクベス』論において指摘したように、ダンカン王の殺害が必然的に父親殺しの様相を帯びるのもそのためであり¹¹、マクベス夫人が「ダンカンの寝顔が父親に似ていなければ、自分が手を下したであろうに」(“Had he not resembled / My father as he slept, I had done’t” [2. 2. 12-13]) と発言していることも、王者のもつ父性を裏づけている。

しかし、王位に就いたマクベスは「国民の父」として臣民に慕われることはなく、家臣たちに、身に合わない巨大な盗品の衣装をまとった小人であるとさえ嘲られる (“like a giant’s robe / Upon a dwarfish thief” [5. 2. 21-22])。マクベス夫人は恐怖に怯えるマクベスを「子供である」と度々叱責しているが、「父なる王」にそぐわない篡奪者マクベスの幼さがここでも強調されているといえる。マクベスは、あくまで「マクベス夫人の息子」に留まり、成熟した男・夫・父としての新しい役柄を演じることができない。

ダンカン王亡き、「父なる王」不在のスコットランドにおいて、バンクォーの存在が際立ち始めるのは必然的なことである。マクベスは、世継ぎをもつ父親であるばかりでなく、王者に相応しい気質をもっているバンクォーに嫉妬し (“his royalty of nature / Reigns that which would be fear’d” [3. 1. 49-50])、バンクォーをローマにおける父親的な存在に君臨しつつあったオクティヴィアス・シーザーに、自らをその下で動きのとれないマーク・アントニーに擬えている (3. 1. 54-56)。

「父」になれない子供マクベスは、「父なる王」ダンカンの殺害を行ったのと同様に、バンクォーの暗殺を企て成功する。しかし、その後に関かれた晩餐会で象徴的な出来事が起こる。王のために用意された椅子に座るよう、家臣たちに求められたマクベスの目には、その椅子に殺したはずのバンクォーの亡霊が座っているように映るのである。命を絶たれても、バンクォーがマクベスの就くべき「父なる王」の座を占めるという構図は示唆に富んでいる。魔女たちによって「王朝の父」 (“father to a line of kings” [3. 1. 59]) になるだろうと預言されるバンクォーの亡霊を前にして、マクベスが跡取りをもった「王家の父」になることもできなければ、臣民たちに保護を与える「国家の父」になることもできないことが決定づけられる。

ダンカンは「父なる王」を、国民という種を国土に植えつけ、育て上げる庭師に喩えているが、その息子マルコムも同じ認識を引き継いでおり、マクベスを倒した後、「植える」という行為に言及している (“What’s more to do, / Which would be planted newly with the time” [5. 9. 30-31])。一方、王となったマクベスが

「植えつける」のは、生命を宿した種ではなく、皮肉にも、バンクオーを待ち伏せる暗殺者たちである（“I will advise you where to plant yourselves” [3. 1. 128]）。マクベスが即位後に行う事業は、バンクオーの息子フリーアンス、マクダフの息子、スワードの息子など、他人の世継ぎの抹殺である。またマクベス治世下のスコットランドでは、国民が「その花びらを開く前に死んでいく」と表現されている（“good men’s lives / Expire before the flowers in their caps / Dying or ere they sicken” [4. 3. 171-73]）。マクベスは「子供たち」の生を育むのではなく、むしろ死を与える存在として描かれ、生をもたらず父のイメージから本質的に切り離されているのである。

4. 「不毛の王笏」

マクベスは妻の愛に応え、「父」になろうと大逆罪を企てるが、マクベスの手にした実質の伴わない王位——「実らぬ王冠」（“a fruitless crown”）と「不毛の王笏」（“a barren sceptre”）——は、マクベスの男性性の欠如を一層印象づけるものであった。当時、「王笏」が「剣」とともに男性性の象徴として表象されてきたことを鑑みると、「不毛の王笏」とは、まさに「父なる王」を演じることのできなかったマクベス自身の男性性の欠如を表現しているといえるだろう。

「不毛の王笏」というシンボルが、マクベスに魔女たちによって手渡されるという点にも注意したい。三人の魔女たちはフォリオ版では“weyward sisters”と呼ばれている¹²。“weyward”は「運命」（“fate”）を意味する“wyrđ”を語源にもっており、三人の魔女たちはギリシャ・ローマ神話に登場する「三人の運命の女神」（Parcae / the Fates）を彷彿させる¹³。「運命の姉妹たち」がマクベスに「不毛の王笏」を握らせるのである。

第一幕第三場において、魔女たちは、生意気な態度をとった気の強い女に仕返しをするために、その夫である船長を「搾り取って藁のように乾かしてやる」（“I’ll drain him dry as hay” [1. 3. 18]）と呪っている（“He shall live a man forbid” [1. 3. 21]）。気の強い女をマクベス夫人に、「藁のように乾かされた」不毛な船長をマクベスに重ね合わせることができよう。跡取りをもうけることができず、他人の世継ぎの抹殺に手を染めることで自らの不毛な運命を打開しようとするマクベスは、まさに魔女たちによって運命を呪われた男（“a man forbid”）であるといえる。

冒頭、『マクベス』は魔女たちの言葉遊びを通して、「父」になることのできないマクベスの男性性の欠如を、マクベスの負わされた悲劇的な運命として演

出している。

FIRST WITCH. Where the place?

SECOND WITCH. Upon the heath.

THIRD WITCH. There to meet with Macbeth. (1. 1. 6-7)

父としても王としても、生をもたらすことのできないマクベス(Macbeth)と、木の生えない「荒野」(heath)が脚韻を踏んでいる¹⁴。マクベスは「国家の庭師」として豊饒な国土をもたらすこともできなければ、「国民の父」として「子供たち」に愛を注ぎ、彼らを育て上げることもできない。正統な王位継承者マルコムの若々しい兵士たちで構成された軍隊は、マクベス治世下の荒れ果てたスコットランドの大地に新たな生命をもたらそうとスコットランドに進軍する(“To dew the sovereign flower and drown the weeds” [5. 2. 30])。マクベスは豊饒なバーナムの森とともにやって来るマルコムの軍隊に駆逐される運命にある。続く第一幕第二場にも、象徴的な脚韻が用いられる。

DUNCAN. No more that Thane of Cawdor shall deceive

Our bosom interest. Go pronounce his present death,

And with his former title, greet Macbeth. (1. 2. 63-65)

マクベスを忠実な臣下として讃えるダンカン王が皮肉にも口にすマクベスと「死」(death)の脚韻は、着実に破滅的な死へと向う悲劇的な存在としてマクベスを描き出すとともに、マクベスが生をもたらす父性的な存在になりえないことを示唆しているかのようである。

死をもたらす存在として、マクダフの無実の妻子を殺戮する暴力的な専制君主が、それでもなお、悲劇の主人公として観客の共感を集めるとすれば、それは「父」になれぬよう呪いを受けたマクベスが自らの不毛な運命を自覚しながらも最後まで運命に抵抗し、「父」になることを諦めようとしなかったためかもしれない。王位の転覆を図る大軍が押し寄せようと、家臣たちが反乱軍側に寝返ろうと、マクベスは命の尽きるまで戦うことを決意し(“At least we’ll die with harness on our back” [5. 5. 51])、虚勢を張りながらも決して自らの王笏を手放そうとはせず、敢然と敵軍に立ち向かう。負け戦であると知りながら、逃げようとはしないマクベスは自らの悲劇的な死を予感している。そして、そうした悲劇

的な存在としてのマクベスの自己認識は、劇中、最も有名な独白にも表れている。

MACBETH. Life's but a walking shadow, a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more. (5. 4. 24-26)

「下手な役者」(“a poor player”)とは、「父なる王」という身丈に合わない衣装を纏い、「響きと怒り」(“sound and fury” [5. 5. 27])を轟かせながら、王朝劇という舞台で無器用な演技を精一杯に続けてきたマクベス自身の姿であろう。王位を手放すことを拒み、「父」を演じ続けようとするマクベスは「不毛の王笏」を手に、反乱軍に独りで立ち向かっていく。そして、ついに二つ目の脚韻——悲劇的な自身の存在 (Macbeth) と「死」(death) の脚韻——を完成させる。「父」になれなかった王マクベスは、自らの血筋を継承する世継ぎも、また自らを父のように慕う臣下も残すことなく、人生という大舞台から姿を消し、悲劇の幕を閉じるのである。

注

- 1 Linda A. Pollock, “Embarking on a Rough Passage: The Experience of Pregnancy in Early-modern Society,” *Women as Mothers in Pre-industrial England: Essays in Memory of Dorothy McLaren*, ed. Valerie Fildes (London: Routledge, 1990) 39-67 (39) 参照。
- 2 シェイクスピア作品の引用は全て G. Blakemore Evans, gen. ed., *The Riverside Shakespeare*, 2nd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1997)に拠る。
- 3 マクベス夫妻の愛情表現としてダンカン殺害を読み解いた論考に、河合祥一郎「マクベス夫人は悪女か？」(『シェイクスピアの男と女』[中央公論新社、2006] 129-63)がある。
- 4 A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy: Essays on “Hamlet,” “Othello,” “King Lear,” “Macbeth”* (1904; rpt. London: Macmillan, 1957) 350.
- 5 こうした“we”の用法については、松岡和子が『マクベス』(筑摩書房、1996)のあとがきで論じている(185-86)。また、フロイトも両者の一体性に着目している(“Some Character-Types Met With in Psycho-Analytical Work,” *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Vol.14, 1914-1916: On the History of the Psycho-analytic Movement, Papers on Metapsychology, and Other Works*, ed. John Strachey and Anna Freud [London: Hogarth P and the Institute of Psycho-Analysis, 1957] 309-33 [324])。
- 6 これまで“blanket”という言葉のもつ卑猥さが数多くの議論を生んできた。たとえば、

サミュエル・ジョンソンやコールリッジは、“blanket”という「野卑な」(“vulgar”)表現に強く反発した (Kenneth Muir, ed., *Macbeth*, 9th ed. [London: Methuen, 1964] 31 註 53 参照)。しかし、この比喩は、王殺しに付与された性的な側面と照らし合わせたとき、はじめてその効果を発揮するといえる。

- 7 また、マクベス夫妻はダンカンの殺害に言及する際、“kill”や“murder”の代わりに、“do”という動詞を多用しているが (e.g. “I have done the deed” [2. 2. 14])、レガットが指摘するように、シェイクスピア作品において、“do”はしばしば性的な意味に用いられている (Alexander Leggatt, *Shakespeare’s Tragedies: Violation and Identity* [Cambridge: Cambridge UP, 2005] 193)。他にダンカンの殺害をマクベス夫妻の性的な交渉として分析した論考に、James J. Greene, “Macbeth: Masculinity as Murder,” *American Imago* 41(1984): 155-80; James L. Calderwood, *If It Were Done: “Macbeth” and Tragic Action* (Amherst: U of Massachusetts P, 1986) 42-47 がある。
- 8 シェイクスピア作品における例として、“You did know / How much you were my conqueror; and that / My sword, made weak by my affection, would / Obey it on all cause” (*Antony and Cleopatra*, 3. 11. 65-68); “I have seen the day, / That, with this little arm and this good sword, / I have made my way through more impediments / Than twenty times your stop” (*Othello*, 5. 2. 262-65)などが挙げられる。
- 9 『マクベス』はジェームズ一世のために執筆・上演された宮廷演劇であるとされており、“father-king”に関して、ジェームズ一世が “By the Law of Nature the King becomes a naturall Father to all his lieges at his Coronation” と述べていることにも注意する必要がある (*The Political Works of James I* [Cambridge: Harvard UP, 1918] 55)。ジェームズの国家・君主観については、Jonathan Goldberg, *James I and the Politics of Literature: Jonson, Shakespeare, Donne, and Their Contemporaries* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983) 85 も参照。
- 10 カントーロヴィチにならい、王に二つの身体——私的な「自然的身体」と公的な「政治的身体」——を見出すとすれば、理想の国王は、二つの身体において、それぞれ「父」となる必要があったといえる。特に Ernst H. Kantorowicz, *The King’s Two Bodies: A Study in Mediaeval Political Theology* (Princeton: Princeton UP, 1957) 372-83 を参照。
- 11 “The murder of the kindly Duncan is little else than parricide” (Freud 321).
- 12 Charlton Hinman, ed., *The First Folio of Shakespeare: Based on Folios in the Folger Shakespeare Library Collection*, 2nd ed. (London: Norton, 1996).
- 13 魔女たちと「運命の女神」の類似性を指摘した論考として、Frederick Kiefer, *Shakespeare’s Visual Theatre: Staging the Personified Characters* (Cambridge: Cambridge UP, 2003) 123 を参照。
- 14 現代の上演では韻を踏んで発音されることはほとんどないが、当時の発音では、“heath”は“Macbeth”と韻を踏んでいた。Fausto Cercignani, *Shakespeare’s Works and Elizabethan Pronunciation* (Oxford: Clarendon P, 1981) 168 を参照。